

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：14601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K21167

研究課題名(和文) 古典の享受・継承に関する学習についての研究

研究課題名(英文) Research on Learning about the Reception and the Succession of Classical Literature

研究代表者

有馬 義貴 (ARIMA, Yoshitaka)

奈良教育大学・国語教育講座・准教授

研究者番号：10549223

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 400,000円

研究成果の概要(和文)：古典の学習においては、作品の内容理解ばかりではなく、その作品が古くから享受され継承されてきたものであるということへの理解もまた重要である。本研究では、現行の中学校教科書を中心に、そのような学習に有用な教材・資料の収録状況を調査した。その上で、教科書を活用した学習の可能性を提示し、「現代に生きる自分たちも古典の継承に関与しうるのだ」と実感できるような学習の必要性を、学会発表及び論文において主張した。

研究成果の概要(英文)：In the study of Japanese classics, it is important not only to understand the content of the works, but also how they have been received and passed down through the ages. In this research, I investigated the state of useful educational materials focusing on junior high school textbooks now in use. On the basis of the results, I presented the possibility of learning using textbooks and insisted the necessity of learning that realizes a sense that "those of us who are alive today are also participating in this act of succession".

研究分野：日本文学(古典文学)・国語科教育(古典教育)

キーワード：古典教育(古典学習) 享受・受容 継承 発展 伝統 言語文化 教科書

1. 研究開始当初の背景

従来の古典教育(学習)では、古典に親しむという目標のもと、古典作品を読むこと自体に重きが置かれ、それらが人々にどのように親しまれてきたのか、どのように読まれ継承されてきたのか、という観点からの教育(学習)は十分になされてこなかった。本研究では、古典の享受・継承に関する教育(学習)の現状を明らかにすること、また、それらに対する注目を教育界・学界に促すこと、更に、新たな教材(学習材)を開発・提案することを目指す。たびたびその意義を問われてきた古典教育(学習)について、古典だからこそ学べる要素に着目し、新たな教育的価値を創出しようとする点に本研究の特色がある。

2. 研究の目的

(1) 学習指導要領との関わり

平成 23(2011)年 4 月から小学校、平成 24(2012)年 4 月から中学校、平成 25(2013)年 4 月から高等学校において、現行の学習指導要領が全面実施された。その学習指導要領では「伝統や文化に関する教育の充実」が謳われている。古典教育(学習)がそこで担うべき役割も小さくないはずであり、この機に古典教育(学習)の意義やありかたについて十分に検討する必要がある。

(2) 従来の古典教育意義論の成果への疑問

古典教育(学習)の意義はどこにあるのか、という問題については、これまでもたびたび論じられてきた。しかし、これまでに提示されてきた古典教育(学習)の意義が果たしてどれだけの学習者を納得させるものであったのかは疑問であると言わざるを得ない。従来の古典教育(学習)のありかた自体が、学習者にとって、各論者の主張するような意義を実感しうるものになっていないということも問題としてあろう。例えば、世羅博昭氏「古典領域における実践研究の成果と展望」『国語科教育学研究の成果と展望』(明治図書出版、2002 年)では、「長い年月にわたって、それぞれの時代に享受され、批判に耐え抜いてきたものが古典である」という古典観に立った古典教育論の紹介がなされているが、果たして、従来の古典教育(学習)は、古典が「長い年月にわたって、それぞれの時代に享受され」てきたものであるということ、学習者に実感的に理解させられていたのだろうか。そのことを改めて問う必要がある。

(3) 従来の教育(学習)に不足していた点

片桐洋一氏は、「『伊勢物語』の本文と『伊勢物語』の享受」『伊勢と源氏 物語本文の受容』(臨川書店、2002 年)において、いみじくも次のように述べられている。

学校教育の場に「古典の時間」があるから「古典」なのではなく、人々に読まれ続け、愛され続けたから「古典」なのです。そのことをわかっていただくためには、「創作の文学史」だけではなく、「享受の文学史」という視点をもっと導入しなければならないと思います。

「人々に読まれ続け、愛され続けたから「古典」なの」という見方は、先に挙げた、「長い年月にわたって、それぞれの時代に享受され、批判に耐え抜いてきたものが古典である」という見方に通ずる。従来の古典教育(学習)では、例えば旧学習指導要領の「古典」の目標にみられる、「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる」といった文言を前提として、古典に「親し」ませようとするに重きが置かれ、古典作品それ自体を読むこと、すなわち作品の内容解釈にほとんどの時間が費やされてきたように思われる。勿論、作品の内容を捉えるのも重要なことではあるが、片桐氏の述べられるように、「人々に読まれ続け、愛され続けたから「古典」である」ということを学習者が理解するためには、古典と呼ばれる作品が実際どのように人々に「親し」まれ、読み継がれてきたものであるのか、すなわちその享受・継承のありかたにも、これまで以上に目を向けてみる必要があるのではないかと。

(4) 古典の享受・継承について学ぶ意義

片桐洋一氏は、『伊勢物語』の享受に関して、次のようにも述べられている。

読者が異なれば、その読者の数だけ異なった伊勢物語が再現されるのです。鎌倉時代には鎌倉時代の伊勢物語があり、室町時代には室町時代の伊勢物語があり、江戸時代には江戸時代の伊勢物語があるのです。(前掲講演録)

ある古典作品の各時代における享受に目を向けることを通して、現代におけるそれについても意識を及ぼせることができれば、自分たちの生きる現代の文化というものを、相対的に、過去からの流れの中に位置づけていくという視点を持つことも可能になってくるだろう。そのような営みの中では、時代によって異なる享受のあり方が見えてくる一方で、時代を超えた普遍的な享受のあり方が見えてくることもありうる。時代を超えた普遍的なありよう、それは、日本人あるいは人間の文化の本質をかいまみることにもつながるものといえよう。

古典作品は、長い享受・継承の歴史を持つがゆえに、時代ごとの文化のありよう、変遷や普遍性などをみていくための軸になりうるものといえる。新学習指導要領に基づき「伝統や文化」なるものを重視した教育を実施していこうとするのであれば、古典作品の持つそのような要素を看過すべきではない

だろう。今後の古典教育（学習）は、作品自体の内容解釈に加え、その作品がかつてどのように読まれ、また、現在にまでどのように読み継がれてきたのかという、享受・継承のありかたにも目を向けたものへとになっていくべきなのではないだろうか。

そのように、学校教育において古典作品の享受・継承について学ぶ意義や、その機会を設ける必要性についての理解を、教育界・学界に促すことが本研究の最大の目的である。現行教科書の調査をおこない、それを踏まえた学習や新たな教材（学習材）の提案を試みたい。

3. 研究の方法

(1) 現行教科書の調査

現行教科書について、古典の享受・継承に関する学習の機会がどの程度設けられているかを調査する。

(2) 先行研究などの調査

古典の享受・継承、特にその学習に関する既存の研究論文・実践報告・旧教科書教材（学習材）について調査する。

(3) 新たな教材（学習材）・学習の提案

上記の調査をもとに、古典の享受・継承に関する学習の現状について検討を加え、それを踏まえて新たな教材（学習材）や学習の提案をおこなう。

(4) 教科書以外の調査

上記(1)～(3)と並行して、古典の享受・継承のありように学習者が触れられる機会として、教科書以外にどのようなものがあるかについても調査する。

4. 研究成果

(1) 先行研究について

古典の享受・継承に関する学習について取り上げた先行論文を調査し、それらにおいてしばしば『伊勢物語』が例として取り上げられていることを確認した。

片桐洋一氏が述べられるように（前掲講演録）「文学作品はもちろん、絵画をはじめとする美術工芸品や、能や文楽・歌舞伎というような演劇にまで大きな影響を与えて来た『伊勢物語』は、たしかに「その享受の文学史を構築する出発点になるのに最もふさわしい作品」であるといえる。しかし、現行の中学校教科書（平成 27 年 2015 検定）において、『伊勢物語』を主たる教材（学習材）として取り上げているものはみられない。『伊勢物語』の享受・継承に関する学習を中学校でおこなうことは、現状では教授者にとっても学習者にとっても負担の大きいものであると考えられる。

そこで、本研究ではひとまず、現行の中学

校教科書にみられる教材の中から有用と思われるものを取り上げ、それらを手がかりとして、教科書を活用した、あるいは契機とした、古典の享受・継承に関する学習の提案を試みた。

(2) 現行の中学校教科書にみられる例

現行の中学校教科書を調査した結果、古典の享受・継承への着目を明確に促している教材も既にあることが確認できた。例えば、学校図書『中学校国語 2』の教材「源平争乱の歴史語り 平家物語」や同教科書中のコラム「古典芸能に見られる古典解釈」、教育出版『伝え合う言葉 中学国語 1』の教材「古典の扉を開く 百年後、千年後の友人であるあなたへ」、光村図書『国語 1』の教材「蓬萊の玉の枝 「竹取物語」から」（特にその導入部分）などである。学校図書『中学校国語 2』のコラムや、光村図書の教材については、各社の以前の教科書（平成 23 年 2011 検定）にはみられなかったものであり、古典の享受・継承に関する学習を重視していこうとする動きがうかがえるものという点で非常に興味深い。

また、上記の教科書や教材以外にも、絵巻や写本など、古典の享受・継承の一端をうかがいしることのできる資料が少なからず掲載されていることを確認した。

(3) 現行の中学校教科書の問題点

一方で、現行の教科書について、次のような問題点もみえてきた。教科書では、古典作品について、古くから親しまれてきたもの、長く読み継がれてきたものであるといった旨のことがしばしば述べられている。だが、そのことを述べるにとどまっているものも少なくなく、前節で取り上げたもののように、実際に例などを挙げながら具体的な享受や継承のあり方にまで言及しているものはあくまで一部に過ぎない、というのが現状なのである。

それでも、前述の通り、多くの教科書教材において絵巻・写本等の資料が挿絵・写真として掲載されており、それらは享受・継承の歴史の一端をうかがいしるために有用なものと考えられる。それらがいつ描かれたものなのか、いつ書写されたものなのかなどを知ることによって、作品自体の成立より後の時代においても、その作品が確かに人々に享受されていたらしいことを学習者は実感しうるだろう。但し、これについても一つ問題があり、掲載された絵巻・写本等については、肝心の制作時期・書写年代等が教科書に明記されていないケース、すなわち、いつ頃のものであるのかが不明瞭な形になっている場合も少なくないのである。勿論、明記されている例もあり、教科書には記されていないとも指導書に詳細な解説が載せられているというケースもある。だが、同じ教科書中でも明記されているものとされていないものがあった

り、指導書にも明記されていないケースがあったりと、絵巻・写本等の資料の扱いについては必ずしも統一的ではないのである。

(4) 古典の享受・継承に関する学習の提案

後掲の学会発表及び雑誌論文(「5. 主な発表論文等」参照)では、上述のような教科書の問題点を踏まえ、それをカバーしたり、あるいはかえって有効に利用したりすることによって、教科書を活用した、あるいは契機とした古典の享受・継承に関する学習が可能になることを、『竹取物語』の学習を例にとりつつ以下のように示した。

教科書中にみられる、「古くから親しまれてきたもの、長く読み継がれてきたものである」という旨の文言を契機として、「それでは実際にどのように親しまれてきたのか、人々はどのようにその作品を読み継いできたのか」という問題を提起することが可能になる。そこから、教科書に掲載されている絵巻や写本などの資料を用いて、それらが作品の享受・継承の歴史をうかがわせるものであるということを学習者に対して示唆する、という方法が考えられる(発表及び論文の中で、早稲田大学「古典籍総合データベース」や、「国立国会図書館デジタルコレクション」などのようなデータベースも、上述のような学習において活用しうるであろうことをあわせて述べた)。

そのような、教科書に掲載されている挿絵・写真への着目を契機に、さらに享受・継承に関する学習の範囲を広げていくことなどもありえよう。例えば、江戸時代の文芸である川柳における『竹取物語』撰取などのように、後代の文化とも結びついた発展的な享受・継承のありようをもおさえることにより、そこから更に、現代の文化とも結びついた発展的な享受・継承のありようなどにも目を向けさせていくことが可能になるのではないと思われる。『竹取物語』のような古典作品が、その成立期ばかりではなく、江戸時代など、後の時代をも経て発展的に享受・継承されてきたことをおさえつつ、映画や漫画、現代語訳などをみれば、現代においても引き続きそれがなされていることが理解されてこよう。

そのような学習を通して、古くからなされてきた古典の発展的な享受・継承、それが現代においてもなされており、自分たちもそれに関わっている、関わりうるのだという実感を持つことこそが、現行の学習指導要領などのいう、「伝統的な言語文化に親しみ、継承・発展させる態度」の育成のためには必要なのではないだろうか。例えばライトや朗読劇など、以前からなされているような学習活動についても、そのような発展的な享受・継承の一端として位置づけていくことで、いっそう意義のあるものとなりうるのではないかと思われる。

(5) 今後の展望など

以上のように、本研究では、古典の享受・継承への着目を明確に促す教材を含む教科書が既にみられ、それを活用しうることや、また、そうでない教科書を用いた場合でも、教科書中の文言や挿絵・写真等への着目を契機として、古典の発展的な享受・継承に関する学習が可能であることなどを示した。

古典が後代の人々によって発展的に享受・継承されてきたものであったと理解することは、例えば、その作品の持つどのような要素が人々を発展的な享受へとかりたてたのか、どのような要素を持つがゆえに発展的に継承されえたのか、という問題を考える契機ともなりえよう。それは、作品自体を理解する必要性、すなわち、作品を読んでその内容を理解することの意義を意識することにもつながっていくものであると思われる。そのように、享受・継承への着目は、その作品の持つ魅力や価値について考える契機ともなりうるのである。

なお、享受・継承への着目は、古典の持つイデオロギー的な要素に踏み込むことにもつながりうるものであり、そのような点から、教材として扱うことの危険性を懸念する立場などもありえよう。しかし、あえて極端な言い方をすれば、そのような要素が絡んでいるかもしれないことを隠蔽したまま、現代にまで伝わり残っているから読む価値があるのだなどと押しつけ、作品を読むことにばかり時間を割くような学習よりは、享受・継承への着目とともに、そのような要素もありうることに意識させていく方が、むしろ健全なものではないかとも思われるのである。勿論、慎重に考えなくてはならない問題ではあるが、古典の享受・継承に関する学習が広がっていけば、そのような問題に関する議論もまた、より活性化していくのではないだろうか。

新しい学習指導要領の実施をひかえた今こそ、古典の享受・継承に関する学習の可能性や必要性について議論し検討していくことが必要であろう。その促進に寄与すべく、本研究課題では、全国規模の学会で発表をおこない、その内容を論文にまとめてオープンアクセスとするなど、得られた成果の発信に努めた。

なお、本研究ではひとまず中学校教科書やそれを用いた(あるいは契機とした)学習について主に取り上げる形となったが、今後、小学校や高等学校におけるそれについても検討し、体系的な古典学習のありかたを考えていくことも求められよう。引き続き取り組んでいきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

有馬義貴、古典の享受・継承に関する学習 現行中学校教科書を中心に、次世代教員養成センター研究紀要、査読有、

第 4 号、2018、53-58

<http://www.nara-edu.ac.jp/CERT/bulletin2018/CERD2018-R7.pdf>

〔学会発表〕(計 1 件)

有馬義貴、古典の享受・継承に関する学習 現行中学校教科書を中心に、全国
大学国語教育学会(第 133 回福山大会)
2017

6 . 研究組織

(1)研究代表者

有馬 義貴 (ARIMA, Yoshitaka)

奈良教育大学・国語教育講座・准教授

研究者番号：10549223